

# 巢湖漢墓の墓制

小澤正人

## はじめに

中国考古学研究において、秦漢帝国の成立を考古学資料から検討することは、重要なテーマとなっている<sup>(1)</sup>。検討の対象には都城や生産遺跡などがあるが、なかでも墓葬研究は資料が豊富であることもあり、これまでも多くの成果があがっている。

筆者はこれまで戦国時代から秦漢時代への墓葬の変化に注目し、いくつかの論考を発表してきた。そのなかで、巨視的に見れば戦国墓から秦漢墓への変化は統一性を持って進んでゆくが、その進捗や内容については、地域的な差異があることを指摘してきた<sup>(2)</sup>。今後は地域ごとに墓制の検討を進め、各地の秦漢墓の様相を明らかにすることで、考古資料からみた秦漢帝国の実像に迫りたいと考えている。

本稿はこのような筆者の秦漢墓研究の一環をなすものであり、安徽省巢湖市で発見された前漢時代の北山頭1号墓と放王崗1号墓<sup>(3)</sup>を検討することで、この地域の漢墓の墓制を明らか

にしようとするものである。

以下、まずそれぞれの墓葬について、埋葬施設と副葬品から、その概要を整理してみたい。

## 1 北山頭1号墓の概要

北山頭1号墓は「北山頭」と呼ばれる丘陵上に位置していた。1997年に市街地の開発に伴い発見され、発掘調査が行われた。発掘調査では、盗掘坑が検出されたが、槨室までは達しておらず、盗掘は免れていることがわかっている。年代は前漢前期と考えられている。

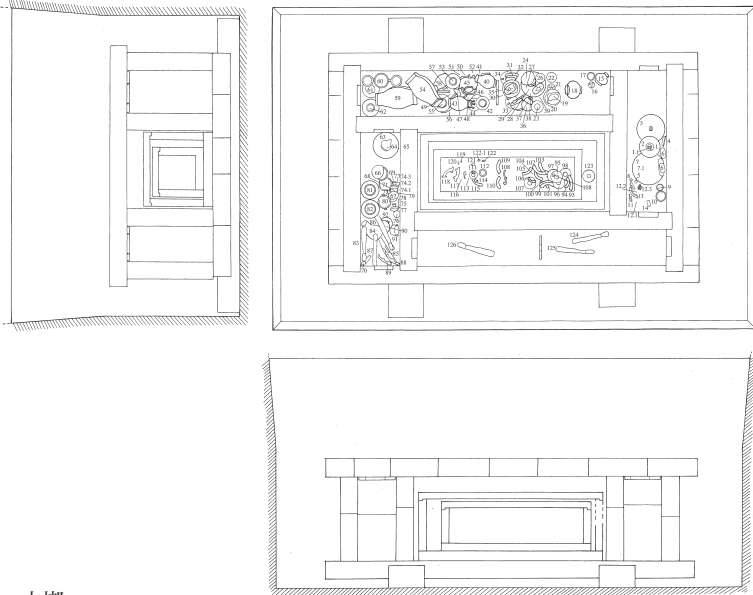
### (1) 墓葬施設 (第1図)

北山頭1号墓の地上部分は1970年代に市街地の拡大に伴い整地されており、墳丘については不明である。

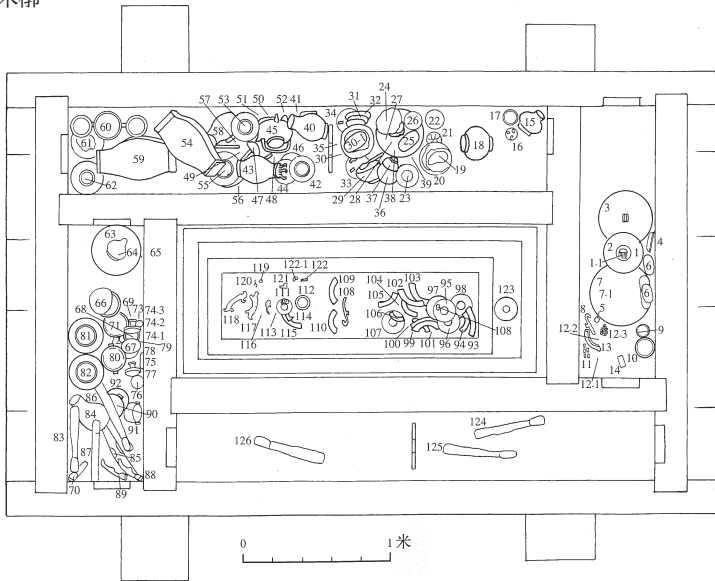
墓坑上部はすでに破壊されていたが、開口部で東西6.4m、南北4.2mを測る。墓坑は開口部から墓底に向かい漏斗状にすぼまり、木槨上部付近からは垂直になる。墓底は東西6.16m、南北3.88mを測る。深さは調査時で2.98mを測るが、報告書では本来は7m前後と推定している。墓坑埋土は特に版築などはされていない。木槨頂部と側部は白色粘土で覆われている。また墓坑底部には木炭が敷き詰められていた。

葬具は木槨木棺である。木槨は軸木の上に置かれている。長

1 墓坑



2 木槨



第 1 図 北山頭 1 号墓墓坑・槨室

(31)

さ4.50m、幅3.00m、高さ1.1m、軸木を入れた高さは1.68mを測る。内部は木板により区画されており、中央の槨室を取り囲むように4つの部屋（東室・北室・西室・南室）に分けられ、副葬品が置かれていた。

木棺は二重で、外棺は長さ2.42m、幅0.98m、高さ0.88m、内棺は長さ1.98m、幅0.65m、高さ0.64mを測る。外棺は全体に黒漆を塗り、蓋板には赤漆で雲文を画く。内棺は外側に黒漆、内側には赤漆を塗る。

遺体は残っていなかったが、出土した歯から死者は男性で、年齢は50歳前後とされている。頭部は東向きであった。

## (2) 出土遺物 (第2～4図)

出土遺物は163点にのぼる。保存状態は良く、多数の漆器が出土している。以下副葬品を想定される用途から①飲食器、②生活用品、③俑、④玉器に分け説明する。

### ①飲食器 (第2図)

飲食器はその用途から、1) 煮炊器、2) 調理器、3) 盛食器、4) 盛酒器、5) 貯蔵器、6) 把取器に分けられる。また素材からは青銅器、銀器、漆器、陶器に分けられる。以下用途ごとに説明する。

#### 1) 煮沸器 (第2図1～5)

煮沸器の器種としては、鼎・甗がある。

鼎には青銅器とそれを模倣した陶器がある。青銅器は4点が出土している（1～3）。いずれも楕円形の胴部に短い脚がつく型式で、大きさもほぼ同じである。全て北室から出土している。

青銅器を模倣した陶製の鼎は3点が、西室からまとめて出土している。脚部が長く、戦国時代楚地域の鼎に似た型式で、いずれも加彩されていた。

青銅器の鼎は脚部が短く、実際に煮沸には用いず、肉や魚のスープ（羹）をいれたものと考えられる。また陶鼎も加彩されており、煮沸に用いることはなかったと考えられる。

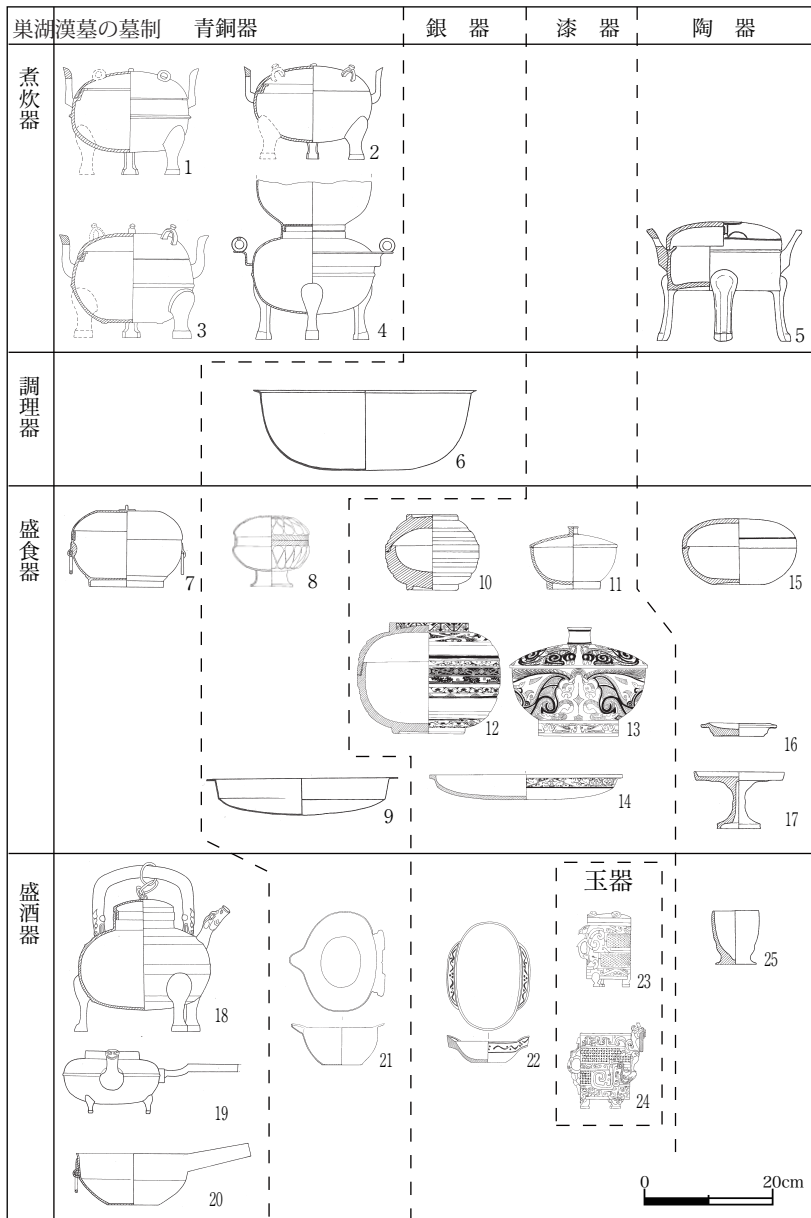
甗は小口鼎と甗を組み合わせたもので、これも戦国楚地域の甗の型式である。

## 2) 調理具

調理具に該当するのは、銀洗（第2図6）で西室から出土している。洗は盆の一種である。漢代の盆については煮沸を含む調理全般に用いられたことを林巳奈夫が指摘している<sup>(4)</sup>。ただし6の洗は銀製であり、銀製耳杯とともに出土していることから、調理以外の盛食器としても用いられた可能性もある。その反面、銅製の洗と型式に大きな変化はないことから、ここでは調理具に分類しておく。

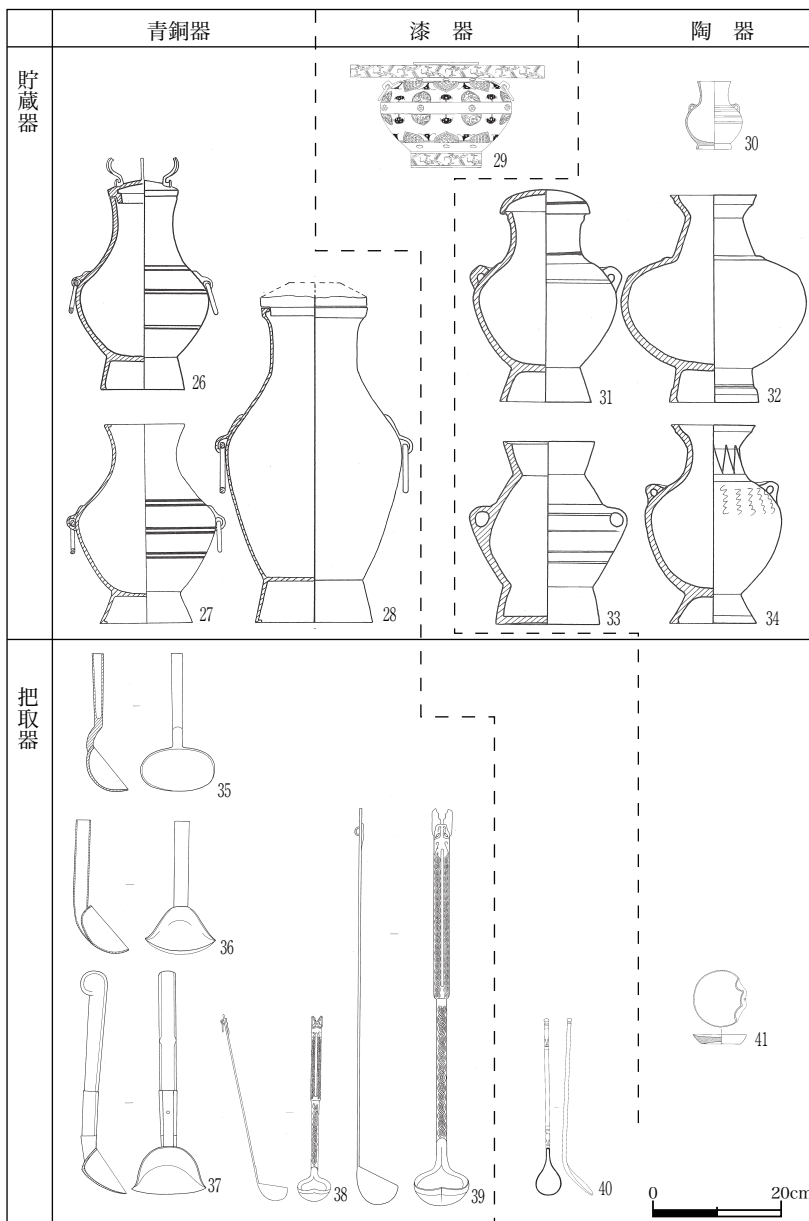
## 3) 盛食器（第2図7～17）

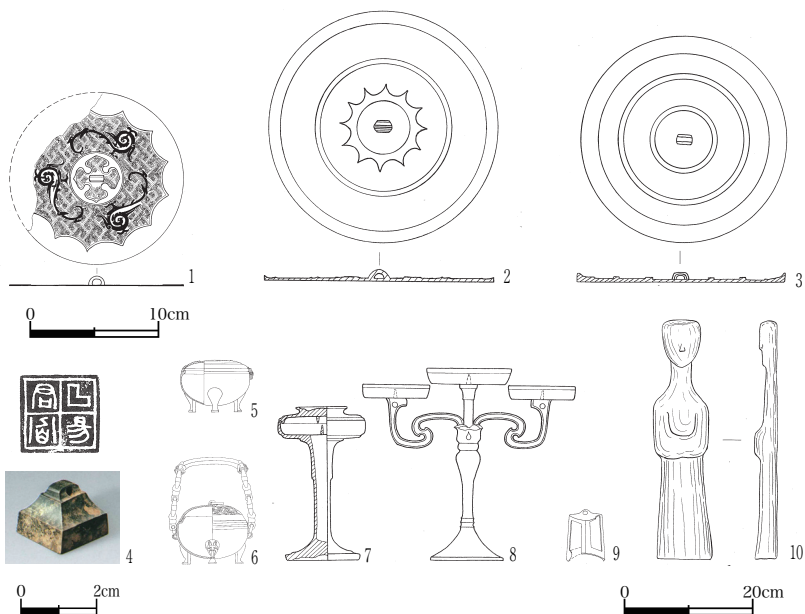
盛食器は胴部が深く有蓋の盒と皿状の盤・豆に分けられる。盒は青銅器（7）、銀器（8）、漆器（10～13）、陶器（15）



第2図 北山頭1号墓出土遺物(1)

(34)





第3図 北山頭1号墓出土遺物(2)

が出土している。陶盒が西室から出土した以外は、北室から出土している。

青銅盒は戦国楚地域の盒の形式である。漆器の盒は蓋が丸みを帯び、つまみが幅広のもの(10・12)と蓋が浅く、つまみが柱状のもの(11・13)の2型式に分けられる。ここでは前者の型式を漆盒A式、後者を漆盒B式とする。一方でそれぞれの型式には大型のもの(12・13)と小型のもの(10・11)があり、前者は2点ずつが、後者は1点が出土している。従って、漆盒はA式とB式がセットであったと考えられる。陶盒は6点が出土している。やや扁平ではあるが、秦から前



漢にかけての典型的な形式である。

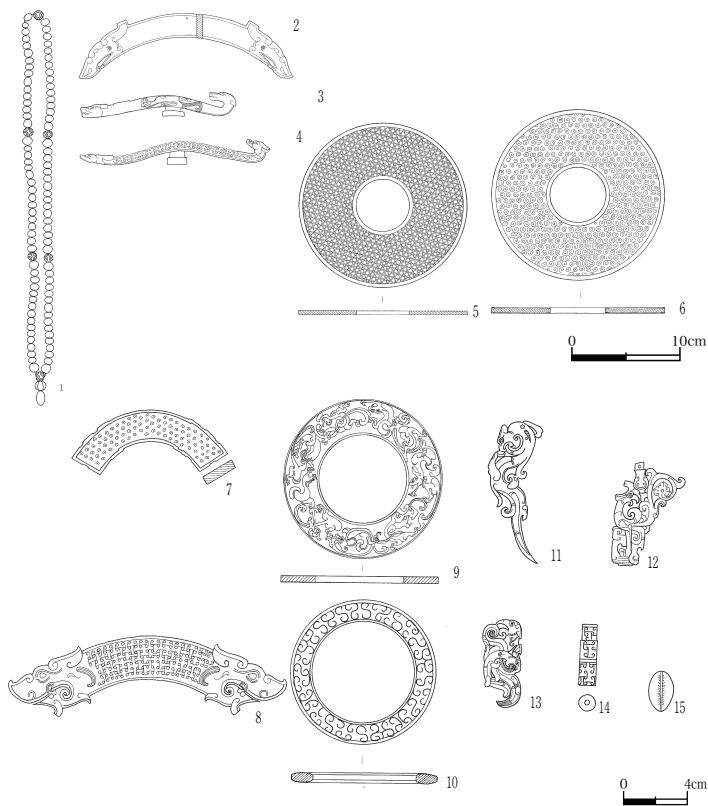
盤・豆には銀器（9）、漆器（14）、陶器（16・17）がある。青銅器と漆器はほぼ同じ大きさで北室から出土している。陶器の盤・豆は銀器や漆器に比べると小型で、西室から出土している。

#### 4) 盛酒器（第2 図18～25）

盛酒器には蓋・把取と筒状の注口を持つ盃（18・19）、注口を持つが蓋がない匱（20）、酒を小分けにした卮（23・24）、飲酒に用いた耳杯（22）や杯（25）などが含まれる。

盃は青銅器のみで、胴部が深く提梁があるもの（18）と小型で胴部が扁平で把取が付くもの（19）があり、いずれも北室から出土している。前者が戦国楚地域の形式、後者は漢代以降に流行する形式である。匱は青銅器のみが副葬されており、北室から出土している（20）。匱は戦国時代までは青銅礼器として盤とセットとなる盥器に分類されるが、漢代以降は酒を注ぐ盛酒器として使われている。卮は杯などに注ぐ前に酒を入れる器物で、玉器のものが出土している（13・24）。やはり北室から出土している。飲酒器の耳杯には銀器（21）と漆器（22）がある。銀製の耳杯は3点が出土しており、西室で銀洗に入れられた状態で出土している。漆耳杯は18点が、いずれも北室から出土している。杯は陶製で6点が西室から出土している（25）。

#### 5) 貯蔵器（第2 図26～34）



第4図 北山頭1号墓出土遺物(3)

貯蔵器は液体を入れた器種で、主には酒を入れたと考えられるが、それ以外の物質を入れた可能性もあるため、盛酒器とは別にした。器種には壺(26・27、31～34)、鋳(28)、小壺(29・30)などがある。

壺には青銅器(26・27)とそれを模倣した陶器(31～34)がある。青銅器は頸部がやや細く、胴部が球状の戦国時代の

壺の型式である。いずれも北室から出土している。陶壺は北室と西室から出土している。小型壺には漆器(29)と陶器(30)があり、いずれも北室から出土している。

#### 6) 把取器(第2 図35~41)

把取器には柄杓(35~39・41)、匙(40)がある。

杓は浅めで料理などをすくうもの(35~37・41)と深く液体をすくうもの(38・39)に分けられる。前者は青銅器(36~37)と陶器(41)がある。さらに青銅器は杓部分が楕円のもの(35)とシャベル状のもの(36・37)に分けられる。いずれも北室から出土している。陶器は楕円形のもので、西室から出土している。杓部が深いものは、小型(38)と大型(39)があり、いずれも北室から出土している。匙は漆器のみで、北室から出土している。

### ②生活用品(第3 図)

#### 1) 鏡(1~3)

鏡は3点が、いずれも東室から出土している。

#### 2) 印章(4)

印章も東室から出土している。印面は田字格で「曲陽君胤」とある。

#### 3) 香炉(5・6)

香炉は2点が東室から出土している。5は鎖の把手をもつ。

6は玉を象嵌している。

4) 燭台 (7・8)

いずれも北室から出土。7は皿部が1、8は皿部が3つある。

③ 俑 (第3図10)

木俑のみが出土している。拱手し、足を見せない姿をしている。西室から7点、南室から3点が出土している。

④ 玉器 (第4図)

玉器は1～3が東室から出土した以外は、いずれも棺内から出土している。

東室から出土したもののうち、1は玉珠、3は玉璜である。玉璜は2点が出土している。この玉珠と玉璜で佩飾を構成していた可能性もある。

4～15の玉器は木棺から出土している。

4は帯鈎で腰部から出土。5・6は璧で、表面の穀粒文が3は小さく、6は大きい。5・6ともに3点が出土している。このうち5の3点、6の2点は死者の上半身から出土。6の1点は内棺と外棺の間で、死者の頭部側から出土している。7・8は玉璜で、7は8点、8は4点が出土しているほか、3と同型式の璜も2点が出土している。9・10は玉環で2点が出土している。11～14は玉飾、15は玉貝である。出土位置から見ると玉璜の一部と玉環・玉飾・玉貝で佩飾を構成していた可能性がある。

## 2 放王崗1号墓の概要

放王崗1号墓も丘陵上に位置しており、1980年代の分布調査時には付近には5基前後の墳丘があったとされる。1996年に建設に伴い発見され、緊急調査が実施された。

調査の結果、早い時期に盗掘を受けていることが明らかになった。盗掘坑は槨室前室にあり、前室と南室の被害が大きい。ただし木棺は盗掘を受けていない。盗掘の規模は不明だが、多くの副葬品が遺されており、その被害は限定的であった。年代は前漢中期と考えられている。

### (1) 墓葬施設（第5図）

放王崗1号墓の周辺はすでに整地されており、墳丘は確認できなかった。ただし1980年代の分布調査時点では、直径30m、高さ8mの墳丘らしきものがあったとの記録が残されている。調査時には、墓坑上部東側で墓坑埋土とは異なる粘りの強い厚さ10～20cmの土層が確認されており、墳丘の残りとも考えられる。ただしその分布は局部的であり、全体的な規模は不明である。

墓坑は開口部で東西9.2m、南北7.0mを測り、墓壁はほぼ垂直で基底で東西8.88m、南北6.8mを測る。墓口から基底までの深さは4.19mである。墓坑埋土は特に版築などはされていない。木槨頂部には厚さ20cmの木炭層が、周囲には50～60cmの木炭層

の層が確認されている。木槨周囲の木炭屑層の外側は、墓壁まで青色粘土が込められていた。また墓坑底部には厚さ50cmにわたり木炭が敷き詰められていた。

墓道は墓坑西壁に設けられており、幅2.66m、水平長5.8m、実寸長7.4mを測る。壁面には木杭と縄で土留めをしている場所がある。墓道底部は墓坑底部とほぼ同じ位置になっている。埋土は版築がなされており、一層は12～16cm、叩打痕は6cm前後を測る。

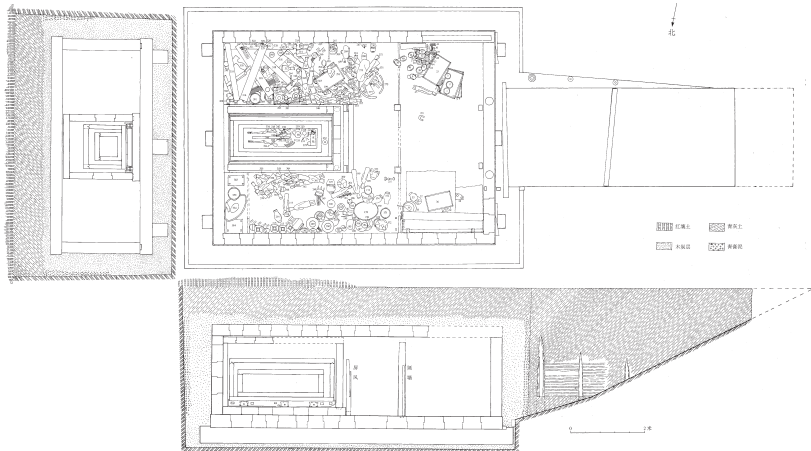
葬具は木室木棺である。木室は軸木の上に置かれている。長さ7.62m、幅5.72m、高さ2.7m、軸木を入れた高さは3.04mを測る。木室西側には墓道に向け門が設けられている。門は2枚の板からなり、幅は2.2mで、内向きに開く。

木室は大きくは前室と後室からなる。前室は長さ5.03m、幅2.18m、後室は4.99m、幅4.60mを測る。前室と後室の間には木壁があり、中央に2枚の木板からなる扉が造られている。扉全体の幅は1.5mで、1枚の板の幅は1.1mを測る。また扉の前には木製の屏風が置かれていた。

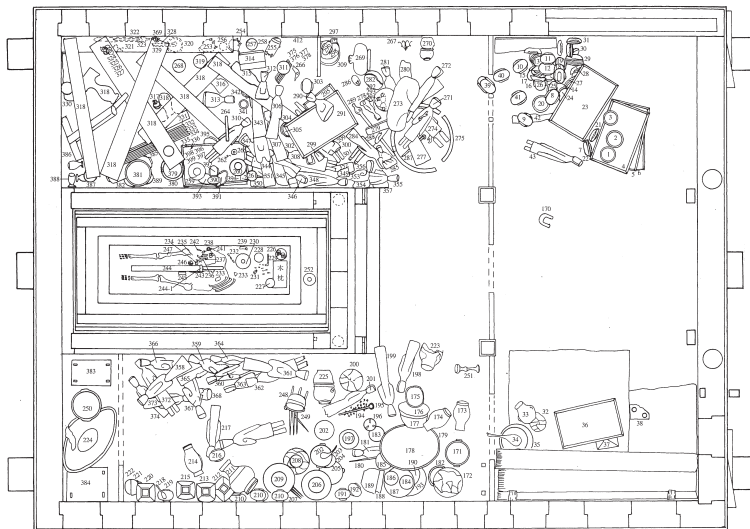
後室には奥壁から内槨が造られている。内槨西側には2枚の木板からなる扉が造られている。1枚の木板の幅は0.88mと0.86mで、高さは1.65mである。後室は内槨以外に仕切りはなく、内槨を囲むように副葬品が置かれている。ここでは便宜的に後北室、後西室、後南室と呼ぶことにする。

内槨内部には木棺が置かれていた。木棺は二重で、外棺は長

# 1 墓坑



# 2 木槨



第5图 放王岗1号墓墓坑·槨室

さ2.76m、幅1.16m、高さ1.10m、内棺は長さ2.24m、幅0.74m、高さ0.70mを測る。外棺は外側は黒漆、内側は赤漆を塗り、外側には赤漆で雲文を画く。内棺は内外ともに黒漆を塗り、さらに外側には黒漆の上に赤漆を塗る。外棺の下には木棺を運ぶ台車が置かれていた。

遺体は残っていなかったが、出土した歯、死者とともに木棺内に入れられていた鉄剣、さらに印章などから死者は男性で、年齢は40歳前後とされている。頭部は西向きであった。

## (2) 出土遺物 (第6～9図)

出土遺物は3237点にのぼる (ただしこの中には銅鏃2421点が含まれる)。保存状態は良く、多数の漆器が出土している。以下副葬品を想定される用途から①飲食器、②生活用品、③玉器、④武器、⑤武器、⑥俑に分け説明する。

### ① 飲食器 (第6図)

飲食器はその用途から、1) 煮炊器、2) 調理器、3) 盛食器、4) 盛酒器、5) 貯蔵器、6) 把取器に分けられる。また素材からは青銅器、漆器、陶器、滑石器に分けられる。以下用途ごとに説明する。

#### 1) 煮沸器 (第6図1～10)

煮沸器の器種としては、鼎・甗・釜がある。

鼎には青銅器 (1～5)、滑石器 (10) がある。青銅製の



鼎は胴部が深く、脚部が長い型式（1・2）、胴部が楕円形で、脚部が短い型式（3・5）に分けることができる。前者は底部に煤が付着しており、実際に煮炊に使われていたと考えられる。後者には煮炊に使われた痕跡がなく、肉や魚のスープを入れるために使われたと考えられる。

甗は青銅器のみで、罐状の釜と甑から構成されており、漢代に普及する型式である。釜は環状鈕がついており、吊すことができるようになっている。底部には煤が付着しており、実際に使われたものと考えられる。

## 2) 調理器（第6図11～18）

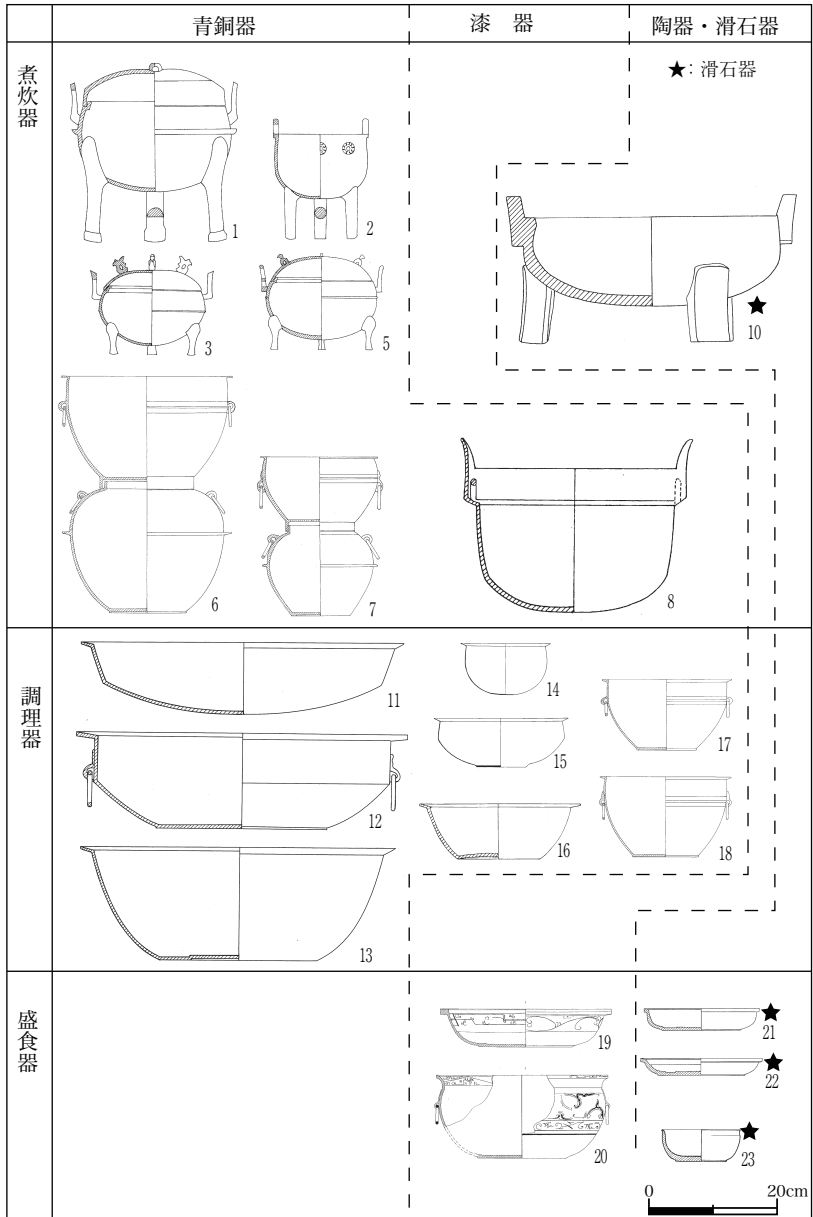
該当するのは青銅器の盆である。11～13は大型の盆。14は胴部が深く、銅に分類されるタイプ。15・16は胴部が浅めのものである。17・18は胴部が深く、鋪首がついている。

## 3) 盛食器（第6図19～23）

盛食器には漆器と滑石器がある。器種としては盤、盆、碗がある。盤には漆器（19）と滑石器（21・22）があるが、盆は漆器（20）、碗は滑石器（23）のみである。盤は漆器と滑石器をあわせて22点が出土している。

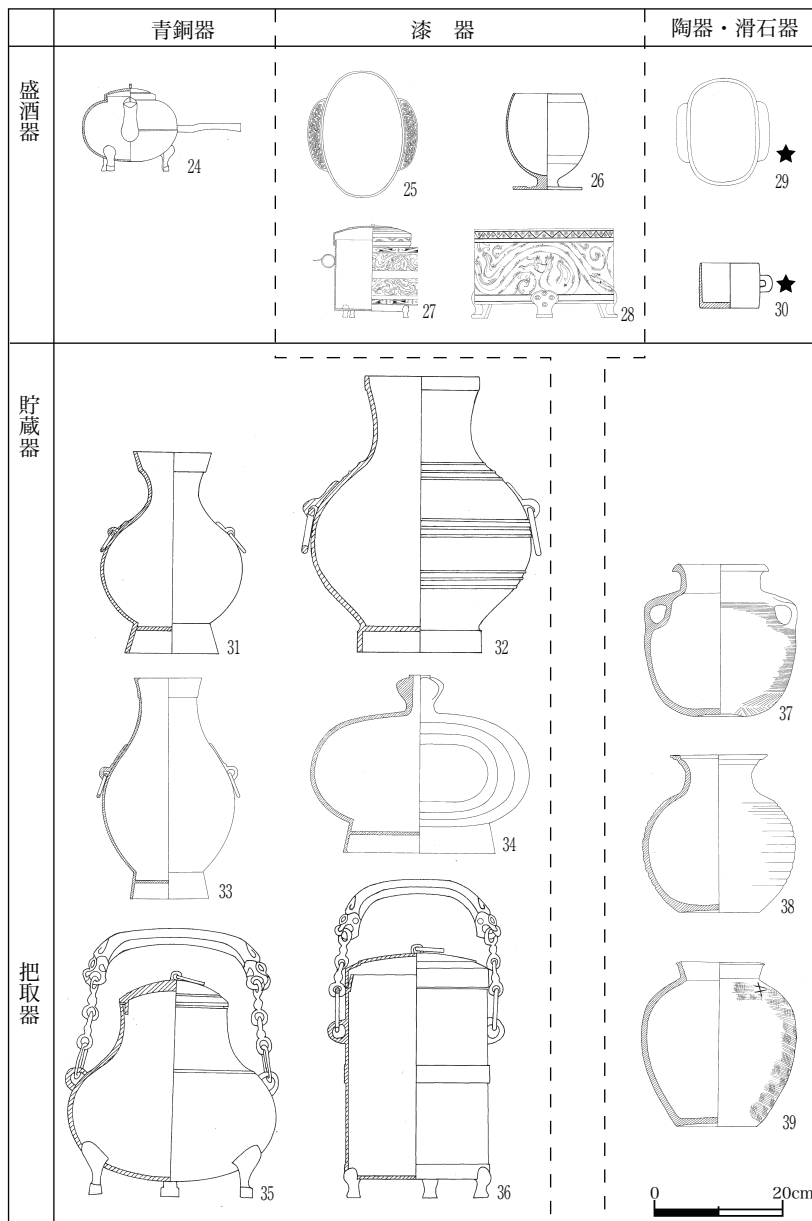
## 4) 盛酒器（第6図24～30）

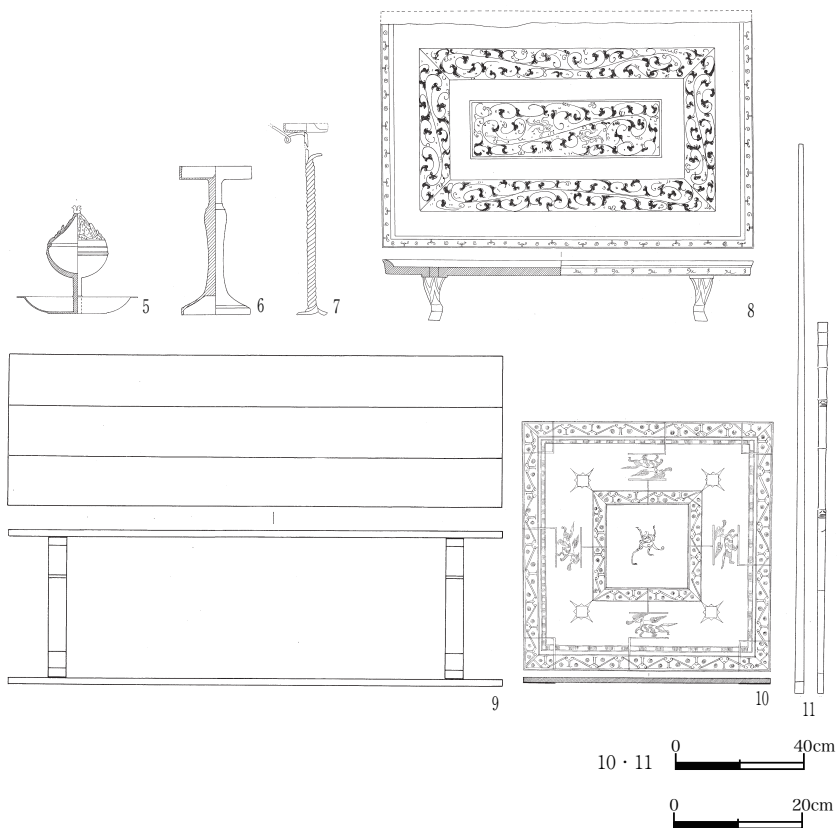
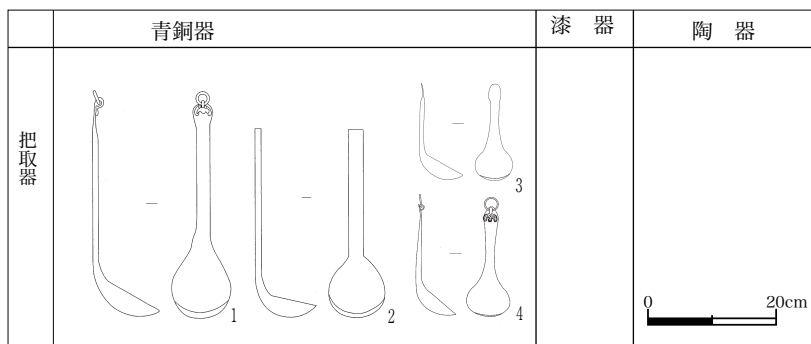
盛酒器は盃（24）、耳杯（25・29）、杯（26・30）、卮（27）、樽（29）がある。盃は青銅製である。耳杯には漆器（25）と滑石器（29）がある。前者は255点が、後者は12点が出土しており、かなりの数に上る。杯には漆器と滑石器があるが、



第6図 放王崗1号墓出土遺物(1)

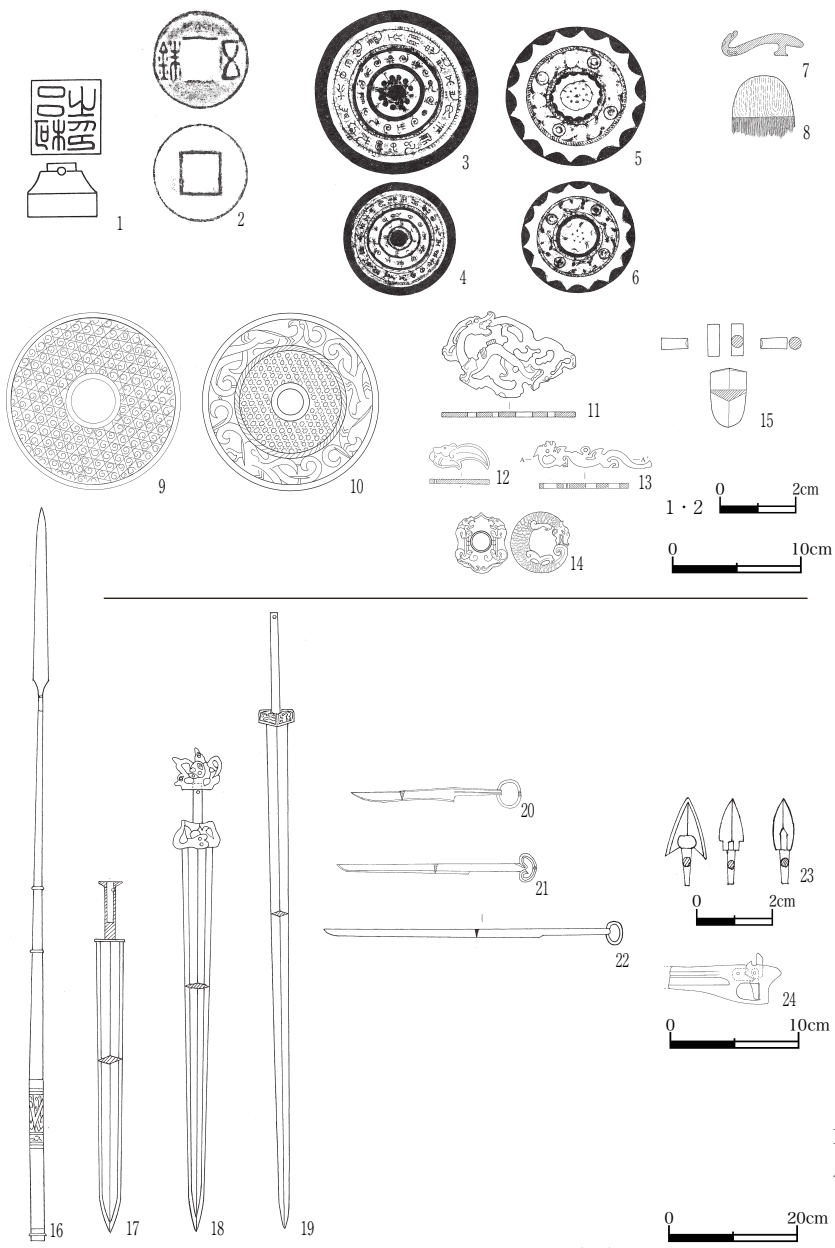
(46)



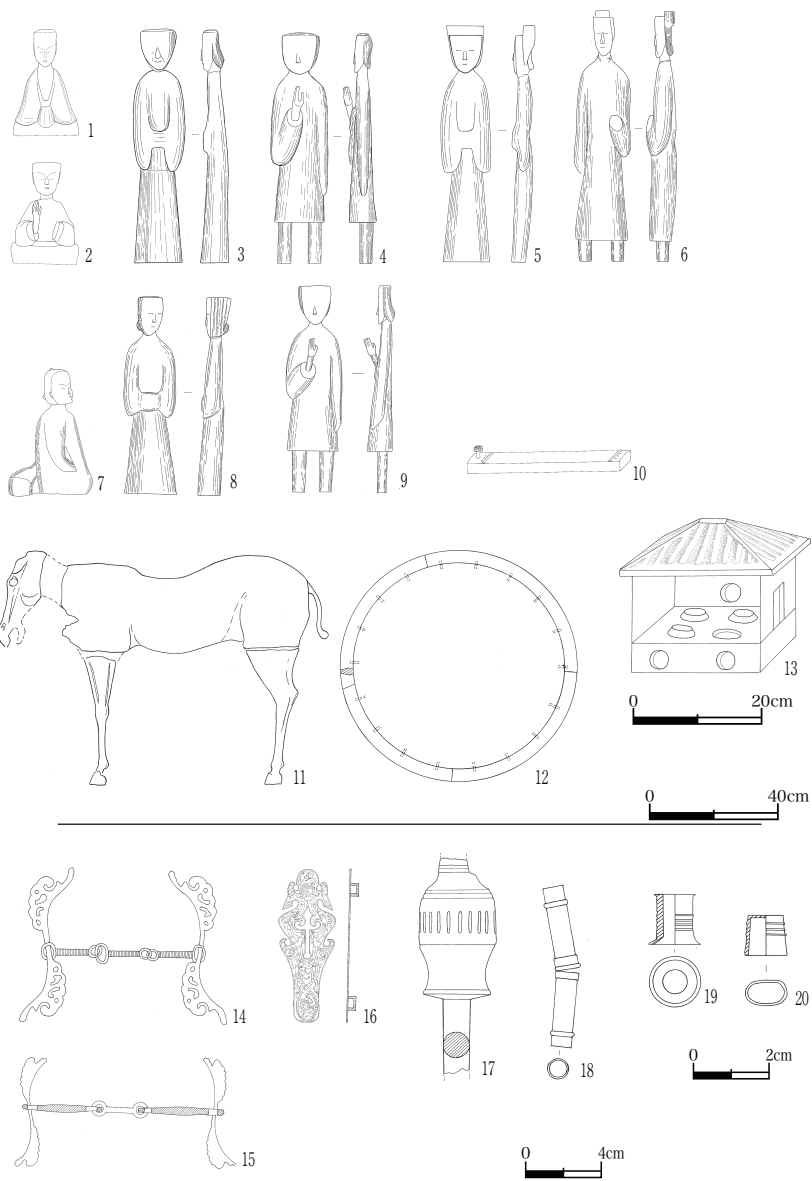


二七九

第7图 放王崗1号墓出土遺物(2)



第8图 放王崗1号墓出土遺物(3)



第9图 放王崗1号墓出土遺物（4）

形状は異なっている。卮・尊はいずれも漆器である。

#### 5) 貯蔵器 (第3図31~39)

機種には青銅器として壺(31・32)、鋚(33)、蒜頭偏壺(34)、提梁壺(35)、提梁筒形卣(36)があり、陶器には罐(37~39)がある。

壺は青銅器のみで、頸部が細く、胴部が球状の戦国期以来の型式(31)と頸部が太く胴部が扁平な漢代の型式(「鐘」とも呼ばれる、32)が出土している。

#### 6) 把取器 (第7図1~3)

把取器としては柄杓が出土している。出土したのは青銅器のみで、大型のもの(1・2)と小型のもの(3・4)がある。

### ② 生活用品

生活用品には青銅製の博山炉(第7図5)・燭台(第7図7)、漆案(第7図8)、木几(第7図9)、漆六博盤(第7図10)、木杖(第7図11)、印章(第8図1)、五銖錢(第8図2)、青銅鏡(第80図3~6)、青銅帶鈎(第8図7)、漆櫛(第8図8)などがある。

漆案は14点が前室から出土している。漆案は耳杯や盤などとともに出土しており、本来は案と耳杯・盤がセットであったと考えられる。漆杖には174cmのものと114cmのものがある。五銖錢は20枚が棺内から出土している。

③ 玉器（第8図9～15）

玉器はいずれも棺内から出土している。9・10は璧で2点が出土している。9は内棺と外棺の間、死者の頭部に置かれていた。10は内棺内、死者の上半身に置かれていた。11～14はまとめて腰部から出土しており、佩飾であった可能性が高い。15は頭部から出土しており、耳・鼻・口に入れた塞玉である。

④ 武器・工具（第8図16～24）

武器としては鉄矛（16）、青銅劍（17・18）、鉄劍（19）、銅刀子（20・21）、鉄刀子（22）、銅鏃（23）、銅弩器（24）が出土している。鉄劍・銅刀子のうち1点（20）は棺内から出土している。銅鏃は2421点と大量に出土している。

⑤ 俑（第9図）

俑には男性俑、女性俑、瑟、車馬俑、竈がある。

男性俑には座俑（1・2）、立俑（3～6）がある。座俑はいずれも冠を被らず、身体の前で手を組むもの（1）と片手を胸の前にあげるもの（2）に分かれる。立俑は冠を被るもの（5・6）と被らないもの（3・4）に分けられ、それぞれに手を組むもの（3・5）と片手のみを胸前にあげるもの（4・6）、足をだすもの（5・6）と出さないもの（3・5）がある。

女性俑も男性俑同様に座俑（7）と立俑（8・9）がある。座俑は冠を被らず、手を身体の前で組んでいる。立俑も冠を被



らず、足をだすもの（9）と出さないもの（8）がある。

瑟は漆器で、俑と組み合わせられた可能性がある（10）。

車馬俑は、馬俑（11）と車輪（12）、さらに関連する部品（14～20）からなる。馬俑は木製で彩色が施されていた。大型8点、小型8点で、合計16点が出土している。車輪は漆器で8点が出土している。本来は先の馬俑と組み合わせて、4点の車馬俑であったと考えられる。

14～20はこの車馬俑の側から出土しており、その部品である。14・15は鉛製の轡、16も鉛製の飾り金具である。17・18は木製傘の部品で、17は傘の骨を差し込む部分、18は柄である。19・20はいずれも青銅製の車軸受である。

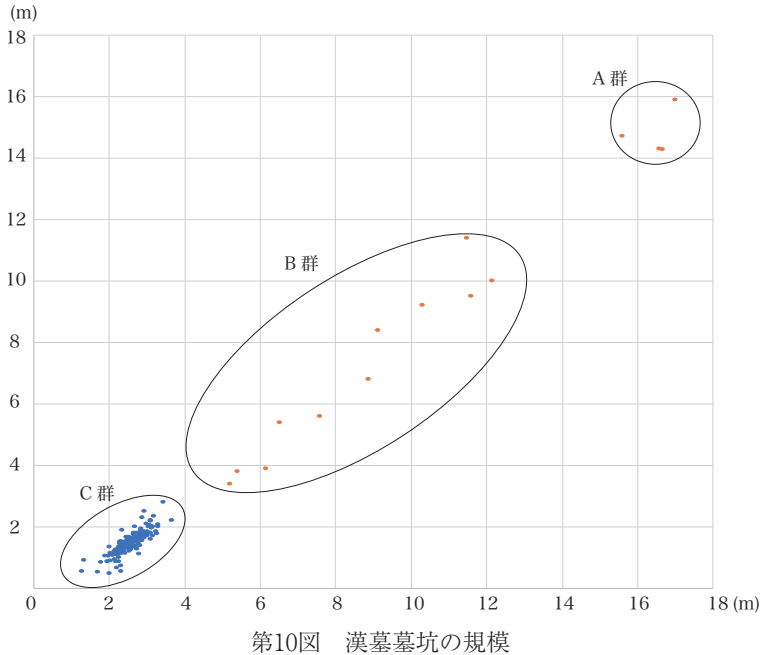
### 3 巢湖地区前漢墓の特徴と変化

以上巢湖地区で発掘された2基の墓葬について、その概要をまとめてきた。次に前漢前期の北山頭1号墓、中期の放王崗1号墓を比較することを通して、巢湖地区の前漢墓の特徴と変化をまとめてみたい。

#### （1）埋葬施設

第10図は前漢時代の豎穴墓の墓底規模をグラフ化したものである。このグラフから豎穴墓は、大きくA群・B群・C群に分けることができる。このうちA群は諸侯王が被葬者と考えら

## 巢湖漢墓の墓制



れる墓葬である。またC群は一般的な墓葬で数も多く、実際には細分できる可能性がある。B群はその中間となる墓葬で、かなりの幅を持つが明確に分けることが難しいため、ここでは一括している。以下、本文中では便宜的にA群を「諸侯王墓」、B群を「大型墓」、C群を「中小墓」と呼ぶこととする。本稿で対象とした北山頭1号墓・放王崗1号墓は、いずれも大型墓に位置づけられる。

葬具は北山頭1号墓が木槨、放王崗1号墓が木室である。木

槨は先秦時代以来の伝統的な葬具であるが、秦代から前漢時代にかけても淮河以南の地域で引き続き造営されている。

木室は木槨の短辺に門をつけたもので、大型墓以上の墓葬で確認されている。これは木室内で人が動くためには人間の身長以上の高さが必要なため、自然と大型墓以上で採用されることになったと考えられる。特に諸侯王クラスの大型墓では、槨室周囲に木製角材を積み上げる「黄腸題湊」と呼ばれる施設を設けている<sup>(5)</sup>。黄腸題湊を設けた木室墓としては前漢前期とされる湖南省象鼻嘴1号墓<sup>(6)</sup>などの事例があることから、前漢中期とされる放王崗1号墓は黄腸題湊系の墓葬を模倣したものと考えられる。

前漢中期の他の大型墓をみると、華北では河北省獲鹿高庄1号墓<sup>(6)</sup>のような磚室墓がみられる。この点は同じ黄腸題湊墓を模倣しつつも、放王崗1号墓のように木室墓へと転換していった長江以南とは対照的である。

つまり巢湖地区大型墓の埋葬施設は前漢時代に入ってから戦国時代以来の木槨墓が造営されていたが、前漢中期になると木室墓へと移行したのである。

## (2) 副葬品

### ①構成

副葬品の構成は、北山頭1号墓では①飲食器・②生活用品・③甕・④玉器、放王崗1号墓では①飲食器、②生活用品、③甕、

④玉器、⑤武器となっている。放王崗1号墓で武器が含まれる以外は、両者の構成はほぼ一致している。武器の副葬については、被葬者がいずれも中年の男性であったことから、男性であっても必須ではなかったことがわかる。被葬者が男性であっても武器が副葬されないことは、湖北省荆州市鳳凰山168号墓などの事例もあり<sup>(8)</sup>、一般的であったと考えられる。従って武器の副葬は、被葬者の生前の社会的なあり方または嗜好が反映されたと考えられる。

従って、巢湖地区の前漢時代前期から中期にかけての副葬品の構成は、①飲食器・②生活用品・③俑・④玉器が基本であったと考えられる。

## ②飲食器の構成について

副葬品の中で大きな比重を占めているのが、飲食器である。

副葬された飲食器は1) 煮沸器、2) 調理器、3) 盛食器、4) 貯蔵器、5) 把取器から構成されている。種別では青銅器・漆器を中心として、陶器・銀器・滑石器が含まれる。

飲食器が副葬品の中心をなすことは、先秦時代の墓葬から見られ、特に殷周時代以降は青銅器が飲食器の中心となっている。これら青銅飲食器は、儀礼祭祀に用いられたことから「青銅礼器」と呼ばれている。青銅礼器は被葬者の社会的な階層を象徴する器物として用いられており、階層上位者ほど器種や副葬点数が多くなる傾向が認められる。戦国時代の湖北省荆州包山2

号墓から出土した副葬品のリストでは、青銅礼器は「大兆金器」、即ち祭祀儀礼用の器物として記載されており、青銅礼器は被葬者が生前行っていた儀礼祭祀を実行するための器物として副葬されていたことが分かる<sup>(9)</sup>。

このような青銅礼器の性格は、秦漢時代になると大きく変化する。青銅飲食器は秦漢時代にも使われ、鼎や壺などの個々の器種も継続しており、儀礼・祭祀において青銅飲食器が使われていたことがわかる。しかし、先秦時代の青銅礼器が持っていた社会的な身分を表現する威信材としての機能は失われている。例えば、列侯の夫人の墓葬である湖南省馬王堆1号墓<sup>(10)</sup>では、青銅製飲食器は副葬されず、代わりに青銅礼器を模倣した漆器が副葬されていた。しかもこれら漆器は副葬品のリストでは、死者に供えられた肉や魚入りのスープの容器として記載されており、戦国時代までのような特別な地位を与えられてはいない。つまり秦漢時代になると青銅礼器による身分の表現は不要となり、威信材としての機能が失われ、祭祀儀礼などでつかわれる道具としての機能のみが残されたのである。

北山頭1号墓と放王崗1号墓でも副葬された飲食器の中で青銅器が中心となっていることは、前漢時代においても青銅器が儀礼・祭祀において一定の役割を果たしていたことを示している。例えば、放王崗1号墓から出土した大型で脚部が高い鼎には底部に煤が付着しており、祭祀や儀礼のおりに実際に火にかけられていたことがわかる<sup>(11)</sup>。同時やや小型で脚部が短い鼎が

出土したことは、できたスープを分ける儀礼も行われていたことが推測される。

青銅器とともに出土した飲食器のなかで目立つのが漆器である。漆器の特徴は盛食器・盛酒器など、飲食時に個人が用いる器種にほぼ限定されていることである。放王崗1号墓では盛食器・盛酒器ともに、案が出土しており、本来これらがセットとなっていたと考えられる。しかも耳杯の出土点数は255点とかなり多いことから、儀礼祭祀としても用いるとともに、日常的な食卓で用いることを想定していたものと考えられる。放王崗1号墓で出土した陶罐はこのような食卓で用いる食品を入れたものであり、同時に出土した竈模型は、その調理をするためのものと考えられる。

北山頭1号墓の陶器、放王崗1号墓の滑石器はいずれも、青銅器・漆器の模倣器である。北山頭1号墓の陶器には彩色が施されており、また青銅器とは別な場所でまとまって置かれていたことから、これら陶器は実用器ではなく、明器であったと考えられる。放王崗1号墓の滑石器もやはり実用とは考えられず、明器と考えるべきであろう。このように青銅器があるにも関わらず明器を副葬することは、葬礼の道具としての明器が成立していたことを表すと考えられる。

以上の検討から、副葬された飲食器は

- a 祭祀儀礼に用いられた青銅飲食器
- b 祭祀儀礼とともに日常的にも使われた漆器や陶罐

c 明器として副葬された青銅器・漆器を模倣した陶器・滑石器に分けられる。

## ②青銅飲食器の系譜について

先に述べたように先秦時代において社会的身分を表現する威信材として用いられていた青銅飲食器は、秦漢時代になると威信材としての機能がなくなり、祭祀儀礼のための道具としてのみ使われた。このような性格の変化により、その器種や型式にも変化が生じている。

前漢前期の北山頭1号墓では、甗(第3図5)、盒(第3図4)、盃(第3図18)、壺(第3図26・27)などは戦国時代の器種・型式のものが副葬されている。それに対して、脚部が短い鼎(第3図1～3)、盃(第3図19)、匱(第3図20)、鈇(第3図28)などは、秦代以降に普及した器種・型式となっている。前者は戦国時代から伝世したものが副葬されたと考えられ、後者は秦以降に製作されたものが副葬されたと考えられる。

前漢中期の放王崗1号墓になると、戦国時代からの伝世が考えられるものは蓋付の鼎(第8図1)と壺(第8図31)のみで、時代が不明な鼎(第8図2)以外の青銅飲食器は秦代以降のものである。特に盛食器では青銅器がなくなっており、戦国時代までのセットからの変化が見られる。

以上の青銅飲食器の前漢前期から中期への変化からは、戦国

時代の青銅礼器が前漢前期にはなお伝世し、使われていたが、徐々に秦漢時代の青銅飲食器へと交替していった過程を見て取ることができる。

### ③生活用品

生活用品とは、日常的な生活で使われる器物を指している。北山頭1号墓と放王崗1号墓の両者に共通する器物としては、香炉（第4図5・6、第9図5）、燭台（第4図7・8、第9図6・7）、鏡（第4図1～3、第10図3～6）、印章（第7図4、第10図1）がある。

香炉・燭台は部屋に置かれたものである。鏡は身だしなみを整えるために使われるものであり、これと関連する器物として放王崗1号墓では漆櫛（第10図8）が出土している。印章は個人的に使われるもので、漢代になると出土が顕著になる。例えば大型墓でも、湖南省長沙咸家湖墓・馬王堆2号墓、湖北省江陵鳳凰山168号墓、河北省石家莊小沿村墓、湖南省永州鶴子岭1号墓などの出土例があり、印章の副葬が一般的であったことがわかる。

この他、放王崗1号墓のみで出土した日用品として銭貨がある。銭貨の副葬は戦国時代までは少なく、漢代以降一般化する。大型墓では前漢前期の馬王堆1・3号墓などで確認されている。しかし前期の北山頭1号墓で出土せず、中期の放王崗1号墓副葬されていることは、このような習俗が巢湖地区では北山頭1



号墓以後に受容されたことを示していると考えられる。

この他、放王崗1号墓からは六博盤、杖など、生活で使われるものも出土している。

このような生活用品の出土は、墓葬を死者の住居とする考えが強化されたことに因ると考えられる。

#### ④玉器

共通して出土した玉器には、玉璧と玉佩飾がある。両墓とも複数の玉璧が死者の上半身を覆うように出土している。また死者の頭部で、内棺と外棺の間からは璧が出土している。満城漢墓2号墓では璧を嵌め込んだ木棺が復元されており、玉の持つ呪術的な力が求められたと考えられる<sup>(12)</sup>。北山頭1号墓、放王崗1号墓出土の璧もこのような能力を求められてと考えられる。

玉佩飾は死者の下半身から出土しており、腰から下げたものと考えられる。玉佩飾は装飾品であるとともに、玉の持つ呪術性も求められて副葬されたと考えられる。

この他、放王崗1号墓からは塞玉が出土しているが、これも玉の呪術性で死体を護ろうとしたことによると考えられる。

玉器については、その呪術性が求められて、副葬されたと考えられる。

#### ⑤俑

北山頭1号墓は簡易な人物俑が少数出土しているのみだが、

放王崗1号墓では種類・量ともに多くなっている。放王崗1号墓の人物俑では、男性俑と女性俑、座俑と立俑といった種類に加え、冠の有無、着衣の別など、複雑な構成をしている。同時に出土した瑟を考慮するならば、伎楽俑も含まれていたと考えられる。さらに放王崗1号墓では車馬模型も出土している。

人物俑も戦国時代からみられるが、発達するのは秦漢代に入ってからである。その背景には、死者が墓中で暮らすという死生観があったと考えられる

#### 4 前漢時代巢湖地区の墓制

以上の検討を踏まえて、前漢時代巢湖地区の墓制についてまとめたい。

前漢前・中期の巢湖地区大型墓の埋葬施設には、戦国時代以来の木材が使用されている。前期の北山頭1号墓は木槨墓であり、戦国時代の伝統が継承されている。巢湖地区では調査例が少ないが、隣接する安徽省南部では、前漢時代を通して木槨墓が造営されており、埋葬施設の伝統は根強いものがあったと考えられる。ただし中期の放王崗1号墓は木室墓となっており、遅くとも中期には一定の規模の墓葬は木室墓へと移行したと考えられる。

副葬品は飲食器、生活用品、俑、玉器を基本としている。飲食器は、青銅器による儀礼や祭祀の道具、漆器による儀礼祭祀

とともに日常的な食事に対応した道具、陶器や滑石器の葬送のための明器から構成されている。このうち青銅器は戦国時代以来の伝統を引いているが、前期の北山頭1号墓から中期の放王岡1号墓にかけて、戦国時代の要素が減少し、秦漢時代以降の新しい要素が増加するといった変化が見られる。ただしその変化は漸移的であることから、戦国時代から秦漢時代にかけての儀礼や祭祀には大きな断絶がなかったことが考えられる。

また飲食器に日常的な食事に対応した道具が多数副葬されていることは、生活用品の副葬や俑の発達ともあわせて、墓葬が死者の住む住居であるという考え方が強くなっていったことの反映と考えられる。このことは墓葬施設に扉を設け、墓葬を住居として見立てている木室墓の出現とも呼応するものといえる。

以上の検討をまとめるならば、巢湖地区の漢墓の墓制は、墓葬を死者の住居として、そこで被葬者が快適な暮らしができるように副葬品を選ぶ、といった秦漢墓の基本的な性格を備えているといえる。同時に、木材を使った埋葬施設や祭祀儀礼の青銅器の副葬などには、戦国時代以来の伝統が継承されていたことが確認できるが、その要素は前期から中期にかけて減少していくことも認められる。このことは、巢湖地区において、戦国墓から秦漢墓への変化が漸移的に進んだことを反映したものと考えられる。

## おわりに

以上巢湖地区の墓制について見てきたが、最後にこの検討結果を秦漢墓の墓制という面から考えてみたい。

文中でも言及したが、先秦時代の墓葬では威信材としての青銅礼器を中心として、やはり威信材としての車馬具などが副葬されており、死者が死後も生前と同じ身分で過ごすことを目的とする墓制が採用されていた。しかし戦国時代になると、墓葬は死者の住居としての性格が強くなっていく。

秦漢時代に入り統一国家が成立すると、青銅器は威信材としての性格がなくなり、儀礼祭祀の道具としての用途のみが遺されるようになる。その結果、墓葬は更に被葬者の住居としての性格を強めることとなり、生活用品や俑などの副葬を中心とした秦漢墓へと移行していったのである。

本稿で検討した巢湖地区の前漢前期・中期の大型墓でも副葬品は生活用品と俑を中心としており、秦漢墓への移行が進んでいたことがわかる。ただし、前漢前期には戦国時代以来の伝統も遺されており、その移行は漸移的に進んだと考えられる。

このような漸移的に移行した巢湖地区に対して、西安地区の墓制がそのまま持ち込まれた地域も存在している<sup>(13)</sup>。このような移行の違いの意味を検討することが今後の課題となろう。

## 註

- (1) 中国における近年の秦漢考古学研究の成果は以下の書物にまとめられている  
中国社会科学院考古研究所『中国考古学・秦漢卷』（2010年 中国社会科学出版社 北京）
- (2) 筆者の関連する研究は以下の通りである  
小澤正人「長江下流域における戦国墓から漢墓への副葬陶器の変遷」（『アジア流域文化論研究』Ⅱ，2006）  
小澤正人「荊州高台墓地の構造に関する一考察」（『社会イノベーション研究』第1巻第2号，2006年）  
小澤正人「鳳凰山168号墓から見た前漢初の葬制」（『社会イノベーション研究』第2巻第1号，2006年）  
小澤正人「華中・華南における前漢墓の様相と地域性についての一考察」（『中国考古学』第8号，2008年）  
小澤正人「湖北省老河口市における秦漢時代墓葬の変遷とその背景」（吉村作治先生古稀記念論文賞編集委員会編『永遠に生きる』所収，中央公論美術出版，2013年）  
小澤正人「馬王堆1号墓副葬品からみた漢墓の特質」（岡内三眞編『技術と交流の考古学』所収，同成社，2013年）  
小澤正人「江漢地域における秦墓の成立」（飯島武次編『中華文明の考古学』所収 同成社，2014年）
- (3) 調査報告書は以下の通りである。  
安徽省文物考古研究所・巢湖市文物管理所編『巢湖漢墓』（2007年 文物出版社 北京）
- (4) 林巳奈夫『漢代の文物』（1976年 京都大学人文科学研究所）
- (5) 黄腸題湊墓の概要については以下の書物にまとめられている。  
北京市大葆台西汉墓博物馆『西漢「黄腸題湊」葬制的考古發現與研究』（2013年 北京燕山出版社 北京）

巢湖漢墓の墓制

- (6) 湖南省博物館「長沙象鼻嘴一号西漢墓」(『考古學報』1981年第1期)
- (7) 河北省文物研究所・鹿泉市文物保管所編著『高莊漢墓』(2006年 科学出版社 北京)
- (8) 湖北省文物考古研究所「江陵鳳凰山一六八号漢墓」(『考古學報』1993年第4期)
- (9) 胡雅麗「楚漢遺策にみられる葬器制度の考察」(『長江流域文化研究所年報』第5号 2007年)
- (10) 湖南省博物館他『長沙馬王堆一號漢墓』(1973年 文物出版社 北京)  
湖南省博物館他『長沙馬王堆一號漢墓』(1976年 平凡社 東京)
- (11) この時期の日常的な煮炊きは竈で行われていたと考えられる。  
また祭祀や儀礼において、鼎で肉や魚のスープを煮ることが行われていたことは、『儀礼』に記述が見られる。
- (12) 中国社会科学院考古研究所『滿城漢墓』(1980年 文物出版社)
- (13) 小澤正人「江漢地区における秦墓の成立」(飯島武次編『中華文明の考古学』所収 2014年 同成社)